

令和元年6月25日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02167

研究課題名(和文) マイトラーヤニー・サンヒターの新写本による校訂本作成と言語及び祭式・思想の研究

研究課題名(英文) New critical edition of the Maitrayani Samhita with a study of its language, ritual and thought

研究代表者

天野 恭子 (Amano, Kyoko)

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：80343250

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：古代インドの祭式文献であるマイトラーヤニー・サンヒター(紀元前800年頃成立)は、最初に原典が1881～86年に出版されて後、同文献そのものの研究としてはほとんどなされてこなかった。研究代表者は一部分に関して世界初となる翻訳(ドイツ語訳)を2009年に出版したが、それに続く研究として、本課題において新校訂本の作成と未訳部分の翻訳に取り組んだ。新発見の写本資料をM. Witzel教授より提供され、写本の読解と批判校訂を行い、全4巻のうち第1巻の校訂本を作成した。伝承と写本の表記の問題を考察し、校訂本の序文とした。祭式と言語の考察を深め、文献成立背景となるヴェーダ期社会について研究成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代インドの文献の中には、聖典としてよく知られているものであっても、研究(原典の校訂や現代語訳)が十分になされていないものがある。本研究の対象であるマイトラーヤニー・サンヒターはそのうちの一つであり、研究が最も待ち望まれているものであった。本研究により、同文献が広く読まれることができるようになり、古代インドの社会についての理解も深まる。古代において、社会の中心であったバラモン文化が、すでに異文化的な思想や儀礼を取り入れていたことは、本研究による特に重要な発見である。マイトラーヤニー・サンヒターの口頭伝承は現地インドにおいてほとんど消滅しており、文化保存の観点からも本研究の意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：The Maitrayani Samhita is an ancient Indian ritual literature, that was composed in ca 800 BC. After its first edition published in 1881-86, the first translation, only of a part, was finally published by me in 2009. This research followed it, and aimed to make a new critical edition and a translation of the not translated part. I read the manuscripts provided by Prof. Witzel in Harvard University, and edited them critically. The first of the four books of the Maitrayani Samhita was almost completed. Problems about transition and writing were examined, that will be put into the introduction of the critical edition. I investigated ritual and language of the Maitrayani Samhita, and presented some arguments about the ancient Indian society that built the background of compiling the Maitrayani Samhita.

研究分野：古代インド文献学

キーワード：古代インド ヴェーダ 祭式 マイトラーヤニー・サンヒター 原典校訂

1. 研究開始当初の背景

ヴェーダ文献 (BC1200 年～) は、古代インド文献の最古層をなし、後のヒンドゥー教や仏教を含むインドの思想のいわば原点をなす。豊富な神話や祭式を巡る哲学的議論は、当時の人々の世界観あるいは社会のあり方を探る、重要な資料の宝庫である。また、ヴェーダ文献は文法・文構造について非常に保守的であったため、言語研究の分野にも重要な資料を供する。本研究の対象であるマイトラーヤニー・サンヒターは、BC800 年前後の成立とされ、ヴェーダ文献の中で、最も古い「祭式解釈」を含み、これは同時に最古のまとまった散文資料である。それ以前の文献は、韻文で作られた讃歌や、短い発語による呪文等だけであることから、この祭式解釈は、ヴェーダ期の所謂普通の文章を知る最重要の手がかりとなる。また、後のインドでは様々な哲学・宗教が発展し多くの文献を生んだが、ヴェーダ祭式解釈の中に見られる自然哲学や論理的思考こそが、その源泉であり、最古の資料なのである。

マイトラーヤニー・サンヒターは、このような重要性にも関わらず、原典が 1881-86 年に L. von Schroeder によって出版された後は、2009 年に申請者のドイツ語訳 (*Maitrayani Samhita I-II. Uebersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der aelteren vedischen Prosa*) が出版されるまで、同文献そのものの研究としてはほとんど進歩を見なかった。それは、マイトラーヤニー・サンヒターの古さ故の言語の難解さ、非常に簡潔な文で記述されているために文章の意味が捉え難いという記述スタイル故の難問、そして、古代の祭官のための祭式専門書という内容の特殊性による理解の困難さによるものであった。研究代表者は、言語学および思想史研究の両方の研究手法によって、同文献の言語と内容について詳しく検討し、それを訳注として記しつつ、翻訳を完成させた。

研究代表者のこの著書によって、その重要性が認識されながらも難解さのため研究に十分に利用されてこなかったマイトラーヤニー・サンヒターが、言語学、思想・祭式学などの分野で資料として利用できるようになったことが、世界的に評価された。国際的な学術誌である *Kratylos* 55 (2010), *Societe de Linguistique* 150/2 (2010), *Indo-Iranian Journal* 54 (2011), *Orientalische Literaturzeitung* 108 (2013) の 4 誌において紹介され、特に、*Indo-Iranian Journal* の Jamison 教授の書評で「ヴェーダ学に残された最も大きな課題の一つが進展した」と評された。さらにこれらの書評において、「著者による未訳部分の翻訳が強く待ち望まれる」と表明されていた。

さらに、この未訳部分の翻訳と並んで、マイトラーヤニー・サンヒターの原文の新しい版の出版を待ち望む声も多くの研究者から研究代表者の元に寄せられた。そのような中、1970 年代に現地インドで写本収集 (写本の写真撮影) を行い、マイトラーヤニー・サンヒターの新写本を多数発見した、米国 Harvard 大、M. Witzel 教授によって、教授所蔵の写本資料の提供を申し出られ、新校訂本の作成を勧められた。このことから、2010 年より校訂本作成の計画がスタートしていた。

2. 研究の目的

具体的に行う研究は次の二点である：

- (1) マイトラーヤニー・サンヒターの写本資料より原文を読み取り、複数の写本から得られる読みを比較する。言語的・内容的な検討を経て、原文を確定、あるいは時に再建し、原典を作成する。複数の写本から得られる読み (異読) を註に記し、原語を確定するために必要な議論をも記す。このようにして、原典の批判校訂本を作成する。
- (2) この批判校訂本に基づいて、さらに内容を精読し、言語学的及び祭式・思想についての考察を行う。そのことを注釈として記しつつ、原文の翻訳を作成する。

同文献は長大なものであり、全体の校訂本及び訳注・解説を出版するとすれば、数巻に及ぶであろうし、完成に要する期間も 10 年程が見込まれる。今回申請の研究においては、その一部を完成し、出版することを目指す。

マイトラーヤニー・サンヒターは、口頭伝承と写本の書き写しの両方の伝承手段によって受け継がれてきたと考えられるが、写本の読解から伝承の実態についても考察する。口頭伝承においてどのような音韻の混乱があったか、口頭伝承を写本に反映する際にどのような表記上の工夫があったか、写本の読解から得られた情報をまとめて記述する。これは、校訂本出版の際にはその序文となる。

なお、申請当初は原文の翻訳は英文で行う計画であったが、全体の一部に相当する、すでに出版されているドイツ語訳が、ヴェーダ語原文の文法構造や語義等を忠実に再現しているとの評価が高く、ドイツ語訳を望む専門家の声が多かったため、翻訳をドイツ語で行うこととした。

3. 研究の方法

マイトラーヤニー・サンヒター全4巻の(1)写本校訂、と(2)内容の研究及び英訳を、次の方法で進めた：

(1)校訂本の作成は、既存の版により得られる原典の読みに、新写本から得られる新しい情報を付け加え、言語的・内容的な検討を経て、原文を確定(時に再建)することによって行われる。第1巻に相当する部分については断片を含め21本の写本があり、申請時までには3本の完全な写本を読み終わっていたが、依然として膨大な作業が残されていた。写本の読み取り(文字起こし)のために、PD研究者である池田宣幸氏の協力を得、計画2年目からはさらにPD研究者である大島智靖氏に加わってもらった。写本を分担して読み進め、成果を突き合わせ、問題点については議論することによって、進捗のスピードはもとより校訂の精度も上げることを目指した。これらの写本読解の成果をもとに、写本に見られる表記上の問題や写本の系統について考察をまとめることを目指した。

(2)未訳部分について、言語・祭式および思想の考察を行い、注釈と翻訳(ドイツ語訳)を進める。言語・祭式および思想について、探求すべきテーマを見つけ、そのテーマに関連する部分の読解を進める。

4. 研究成果

(1)写本校訂については、マイトラーヤニー・サンヒター全4巻のうち、第1巻の校訂本がほぼ完成した。写本資料の提供者である Witzel 教授の勧めによって、Harvard Oriental Series において出版するべく、同教授と打ち合わせを行い、現在出版準備中である。写本に見られる表記上の問題、口頭伝承と書き写しの伝承の実態について、そして、写本の系統について、考察をまとめた。この議論は、校訂本の序文を形成する。また、当初の計画にはなかったことであるが、マイトラーヤニー・サンヒターに含まれるマントラ(呪文、祝詞、讃歌)について、ヴェーダ文献における出現箇所を一覧できる、Bloomfield, Vedic Concordance (1906; Enlarged Electronic Version 2005)の情報を、各マントラの下に埋め込んだ。このことは、学生アルバイトの協力によって可能になった。マントラの出典は従来、逐一 Vedic Concordance を調べるのが常であったが、本校訂本ではマントラごとに一目で出典を知ることができ、直ぐに、マントラを含む文献同士の関係性の考察を始めることが可能である。研究者にとって利便性が高いだけでなく、文献同士の関係についての研究を大きく進める可能性を与えるものである。

(2)言語・祭式については、下の雑誌論文 - の考察を行い発表した。これらの考察で得た特に重要な視点は、マイトラーヤニー・サンヒターの成立過程においてはいくつかの潮流が段階的に影響を及ぼしているということで、特に、ヴェーダの正統派からすれば異端的、異文化的な社会的集団の影響が想定されるという視点である。この視点で祭式・儀礼を考察したものが、言語と思想を考察したものがである。これらはマイトラーヤニー・サンヒターの成立背景となるヴェーダ期社会についての理解を、大きく進展させた。これらの考察を行う際、マイトラーヤニー・サンヒターの該当部分を読解し、翻訳を進めることができた。その他の部分についても、第1巻のマントラ部分および第3巻の前半部分を、順次翻訳している。翻訳の出版については、本研究終了後、次の研究の課題となる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7 件)

Amano Kyoko. "Ritual Contexts of *Sattra* Myths in the Maitrayani Samhita". *Vratya culture in Vedic sources. Select Papers from the Panel on "Vratya culture in Vedic Sources" at the 16th World Sanskrit Conference (28 June - 2 July 2015) Bangkok*. 査読有、2016, 35-72.

Amano Kyoko. "Indication of Divergent Ritual Opinions in the Maitrayani Samhita". *Vedic Sakhas: Past, Present, Future. Proceedings of the Fifth International Vedic Workshop, Bucharest 2011*. 査読有、2016, 461-490.

天野恭子、「祭式を裏付ける「知識」を巡って。—古ヴェーダ祭式文献における *ya evam vidvan / veda* の使用法と哲学思想の発展—」『待兼山論叢』、査読有、第50号哲学篇、2016、29-56.

Amano Kyoko. A Ritual Explanation Concealing its Name. Maitrayani Samhita I 9 (*caturhotr* chapter)". *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 査読有, Vol. 65, No.3,

2017, 1039-1046.

Amano Kyoko. The Development of the Uses of *ha / ha vai / ha sma vai* with or without the Narrative Perfect and Language Layers in the Old Yajurveda-Samhita Texts. Proceedings for the 33rd South Asian Languages Analysis Roundtable (SALA-33), Workshop "Diversity in the Vedic Lexicon and its role in reconstructing the most ancient Indo-Aryan Language layers", Adam Mickiewicz University Poznan, 2017/5/15-17. 査読有、印刷中。

Amano Kyoko. A Non-Srauta Ritual in the Oldest Yajurveda Text. Maitrayani Samhita IV 2 (Gonamika Chapter). *Proceedings of the 17th World Sanskrit Conference, Vancouver, Canada, July 9-13, 2018*. UBC cIRcle Online Digital Repository. <https://circle.ubc.ca>. 査読有、印刷中。

Amano Kyoko. "What is 'knowledge' justifying a ritual action? Uses of *ya evam veda / ya evam vidvan* in the Maitrayani Samhita. *Proceeding of International Symposium "To the Sources of the Indo-Iranian Liturgies" 2016/6/9-10, Liège*. 査読、印刷中。

〔学会発表〕(計 16 件)

天野恭子「願望祭とヴェーダ期における社会秩序の維持」京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム・南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第6回シンポジウム『王権と宗教』、2019/3/23、東京大学。

天野恭子「Agni Vaisvanara の持つ機能」第11回ヴェーダ文献研究会、2019/2/16、京都大学。

天野恭子「願望祭とヴェーダ期における社会秩序の維持」京都大学人文科学研究所共同研究班「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」定例研究会、2019/2/8、京都大学人文科学研究所。

Amano Kyoko. A Non-Srauta Ritual in the Oldest Yajurveda Text. Maitrayani Samhita IV 2 (Gonamika Chapter). The 17th World Sanskrit Conference, at the University of British Columbia, Vancouver, Canada, July 9-13, 2018.

天野恭子「古ヤジュルヴェーダにおける Angiras について」第10回ヴェーダ文献研究会、2018/3/26、東北大学。

天野恭子「ヴェーダ文献に見られる牝牛崇拝の萌芽」京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム・南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第4回シンポジウム『古代・中世インドの[儀礼][制度][社会]』、2018/3/24、東京大学

天野恭子「Maitrayani Samhita における非シュラウタ儀礼の記述について。MS IV 2 gonamika 章に記述される儀礼は何を語るか?」京都大学人文科学研究所共同研究班「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」定例研究会、2018/1/12。

天野恭子「Maitrayani Samhita における *manas-*」第9回ヴェーダ文献研究会、2017/10/8、京都大学。

Amano Kyoko. Sprachschichten in den aelteren vedischen Prosa-Texten: Verwendung von *ha sma* mit dem Indikativ Praesens und *ha* mit dem narrativen Perfekt. Collegium Turfanicum 89, Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Institut furr Turfanforschung, 2017/5/18.

Amano Kyoko. Uses of *ha / ha vai / ha sma vai* with or without the Narrative Perfect and Language Layers in the Old Yajurveda-Samhita Texts. The 33rd South Asian Languages Analysis Roundtable (SALA-33), Workshop "Diversity in the Vedic Lexicon and its role in reconstructing the most ancient Indo-Aryan Language layers", Adam Mickiewicz University Poznan, 2017/5/15-17.

天野恭子「黒ヤジュルヴェーダ・サンヒターにおける *ha / ha vai / ha sma vai* の使用法の発展」第8回ヴェーダ文献研究会 2017/3/12, 淑徳大学東京キャンパス。

天野恭子「祭式を裏付ける「知識」を巡って -古ヴェーダ祭式文献における *ya evam vidvan / veda* の使用法と哲学思想の発展-」. 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム-南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性-」第一回シンポジウム, 京都大学, 2016/10/8.

天野恭子「ヴェーダの写本及び口頭伝承についての考察- Maitrayani Samhita の写本研究より -」 第7回ヴェーダ文献研究会, 大阪大学, 2016/9/25.

天野恭子「祭式名を隠した祭式記述 (Maitrayani Samhita I 9)」日本印度学仏教学会 第67回学術大会, 東京大学, 2016/9/4.

天野恭子「Maitrayani Samhitaにおける *ya evam veda / ya evam vidvan*の使用法. ブラフマニズムにおける哲学的傾向の源流を探る」京都大学人文科学研究所 藤井正人教授研究班「ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性-」定例研究会, 京都大学, 2016/7/22.

Amano Kyoko. "What is 'knowledge' justifying a ritual action? Uses of *ya evam veda / ya evam vidvan* in the Maitrayani Samhita" International Conference "To the Sources of the Indo-Iranian Liturgies." Liège, 2016/6/11.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。